

# 当院における母児同室制の検討

—母親の意識調査を通しての一考察—

2階西病棟 分娩育児部

○西岡 睦代・佐野 里香・池上佐和子

田崎 ゆか・谷脇 文子

## I はじめに

母児同室制は、母子相互作用を強め、母性の確立を促進する手段のひとつとして有効であり、その利点はよく知られている。しかし、実際には、実施上の問題もあり、高橋<sup>1)</sup>の調査によると、わが国では、53.9%しか取り入れられていないといわれている。

当施設では、昭和57年以来、経陰分娩では産褥3日目より、帝王切開分娩では7日目より、24時間の母児同室制を行ってきたが、母親の疲労、不眠、育児不安などの問題もみられる。

そこで、今回、入院中及び退院後の2回にわけて、母親の意識調査を行い、その結果を分析し、考察したので報告する。

## II 研究目的

当院における、母児同室制の問題点を明確にし、さらに、母親が、どのような母児同室制を望んでいるのかを知り、今後の援助方法の改善に役立てる。

## III 調査期間、対象及び方法

調査期間は、入院群は、昭和63年8月1日～10月31日の3カ月間である。退院群は、昭和63年11月1日～11月14日の2週間である。

当院において、出産した褥婦30名（未熟児出産を除く）に、入院中と退院後に、アンケートを配布し、入院群は直接回収し、退院群は、郵送にて回収した。

入院群及び退院群の、対象の分類については、以下の表の通りであった。

表 1. 対象の分類（入院群） n=30

分娩様式別 初・経産別	経陰分娩群	帝王切開群	合 計
初産婦群	6名(20%)	5名(10%)	11名(30%)
経産婦群	16名(53%)	3名(17%)	19名(70%)
合 計	22名(73%)	8名(27%)	30名(100%)

表 2. 対象の分類（退院群） n=20

分娩様式別 初・経産別	経陰分娩群	帝王切開群	合 計
初産婦群	3名(15%)	5名(25%)	8名(40%)
経産婦群	11名(55%)	1名(5%)	12名(60%)
合 計	14名(70%)	6名(30%)	20名(100%)

#### Ⅳ 当院における母児同室制の現状

##### 1. 構造及び収容方法

褥室は、個室又は2人部屋で、児はコットベッドに収容し、母親のベッドの横に置く。

##### 2. 育児参加

- 1) おむつ交換，更衣，その他，児の身の周りのこと全般を，すべて母親が行う。
- 2) 授乳は，授乳室で行い，母乳量の測定は，母親自身で実施し，専用用紙（〇〇ちゃんのメモ）に記入する。
- 3) 沐浴は，産褥3日目に見学をし，4日目に演習し，5日目より実際に母親自身が全て実施している。

##### 3. 面 会

原則として，父親のみとし，入室方法は，手洗，ガウン着用後，入室する。面会時間は，一般の面会時間と同様であるが，父親の仕事の都合などによる場合は，個々に応じ，許可している。

#### Ⅴ 結 果

##### 1. 母子相互に関連した質問

###### 1) 入院群（30名）について

質問(1) 母児同室制は良かったか

- ① 初産，経産及び分娩様式別による差は，殆どなく，全体の70%（21名）が，良かったと答えた。

理由は，児と常に接触しているので，子供の状態がよくわかり安心できる，等であった。

- ② どちらともいえないと答えた者は，全体の26.6%（8名）であった。

理由は，疲労と睡眠不足によるものが，最も多く，次いで同室者への気疲れ等であった。

質問(2) 母児同室の開始時期は，適当か

- ① 経産分娩及び帝王切開いずれも，ほぼ全員が，丁度良いと答えていた。

質問(3) 母児同室中の育児不安の有無

- ① 不安が無いと答えた者は，全体の33%（10名）であった。
- ② 不安があると答えた者は，全体の67%（20名）を占めていた。初産婦が10名中8名，経産婦20名中12名の者が，あると答えていた。
- ③ 不安の内容は，初産，経産に大差はなく，母乳栄養に関するものが，最も多かった。

質問(4) 母児同室は，将来の育児不安の解決に役立つか

- ① 役立つと答えた者は，全体の83.5%（25名）を占めていた。初産婦は11名中7名，経産婦は19名中18名の者が，答えていた。

理由は，基本的な育児技術の修得ができ，退院後も役立つそう，であった。

###### 2) 退院群（20名）について

質問(1) 役に立ったと答えた者は，全体の65%（13名）であった。初産婦は，8名中5名，経産婦は，12名中8名の者が答えていた。

- ① 内容は、初産、経産ともに、育児に慣れており、とまどうことが少なかった、等である。
- ② どちらともいえないと答えた者は20名中5名で、その内容は、睡眠不足、同室時期の日数が1～2日間と短かった、と答えていた。

#### 質問(2) 退院後の家庭保育の不安の有無

- ① 不安が有ると答えた者は、全体の60%（12名）であった。初産婦は、8名中6名、経産婦は、12名中6名であった。

不安の内容は、初産婦では、夜泣きやおむつかぶれに関するものが多くみられた。経産婦では、母乳が続けられるか、又、第1子にアレルギーがあるので、今回も心配等、児の将来に関するものであった。

- ② 家族（父親）の役割に関連した質問

- i 協力者が有ると答えた者は、全体の75%（15名）であった。その内、核家族は、13名中9名、大家族は、7名中6名であった。
- ii 協力者については、核家族13名中12名の者が、夫をあげていた。
- iii 夫の育児参加の内容は、沐浴、授乳、おむつ交換、上の子の面倒をみる、であった。

## VI 考 察

1. 当院の母児同室における利点として、母児相互作用の促進に役立っていると言えると考えられた。

それは、母児同室制が良かった、と答えた褥婦が、初産、経産ともに高値を占め、いつも子供の顔が見られる、子供への情が深まるなど児との接触に対する喜びの感情表出が認められ、母親の愛着形成の促進に役立っているものと思われた。

また、退院群の褥婦は、家庭での保育でとまどうことが少ない、と答えており、母児同室の導入が、母親の育児に自信を持たせる効果を得ている。

母児同室の開始時期は、初産、経産別及び、分娩様式別いずれも、丁度良いと答えており、現状のままでも良いことを確認した。

2. 次に、当施設における、母児同室制の問題点として、以下のことがわかった。

- 1) 入院群、退院群の約3割は、母児同室制について、疲労と睡眠不足がある。
- 2) 同室中の不安は、入院群、退院群ともに、初産婦が高率である。その内容は、入院中は、母乳の与え方、母乳不足などである。

疲労や睡眠不足と母乳栄養については、相関関係にあるといえる。それは、母乳不足の不安から、授乳回数の増加、特に夜間の頻回の授乳は、母親の睡眠不足に通ずる。これに、母親の性格や家族背景が加わり、育児不安を助長させることにもなりかねない。特に、初産婦に対するサポートは、重要である。

産褥期の、母親役割の取得過程において、新藤ら<sup>2)</sup>は、『育児疲れの予防は、母性意識の形成、発展のために、非常に大切なことである』と述べている。

また、母乳栄養の確立については、神津ら<sup>3)</sup>の調査結果からも、『産褥期に入って指導しても、母乳栄養確立は困難な場合もあり、妊娠中から、乳房の手当や、自己管理が必要』と考える。従っ

て、母親に対し、積極的な援助が必要である。

- 3) 母親とその家庭の関係については、核家族が多いことにより、家庭における、父親の役割が大きくなっていることが明らかになった。

当院では、母児同室制を導入し、父親も、入院中から児と接触する機会が持てる事により、母親との協力体制を作る上で、有用であったと考えられた。

以上のことから、今後の母児同室制を、より有用なものとするため次のことをまとめた。

- 1) 母乳栄養確立のため、妊娠中から一貫した管理が行えるように、母親学級での指導の徹底と、外来での乳房チェックを充分にする。
- 2) 産褥期は、母乳分泌の促進に加え、母親に対しては、あらゆる機会を通して、個別指導を徹底する。
- 3) 母児同室制の時期、方法については、母親の性格、家族背景、さらに行動をチェックリストを用いて観察し、アセスメントし、個々に応じた方法をとっていく。
- 4) 退院後も、育児の疲労が予防できるように、母親だけでなく、その家族に対する援助が必要であり、特に父親に対し、母親を支援し、退院後の環境の変化に適応出来るよう、入院中より指導する。

## VII おわりに

当院における母児同室制の現状を、入院中と退院後において、母親の意識調査をもとに、分析した。その結果、利点として、母性意識形成の発展に役立っていることがわかった。一方、問題点として、疲労や睡眠不足、母乳に関することがあげられた。

今後、この問題に対する改善策を実施し、より母児同室制の効果が高められるようにしていきたい。さらに、入院中のみでなく、地域における継続した看護を進めていきたい。

## 引用文献

- 1) 高橋悦二郎：母児同室制—実態と妊婦の意識調査—，周産期医学，Vol. 13，No 12，P. 372～379，東京医学社．1983．
- 2) 新藤幸恵他：妊産褥婦の母性意識の形成とその援助—母親役割取得過程との関連において—，助産婦雑誌，Vol. 41，No 1，P. 77～81，医学書院．1987．
- 3) 神津今朝子他：母乳栄養確立へのアプローチとその検討，助産婦雑誌，Vol. 31，No 10，P. 621，医学書院．1977．

## 参考文献

- 1) 和田サヨ子：出産後の褥婦を脅かすもの，助産婦雑誌，Vol. 40，No 10，医学書院．1986．
- 2) 渡部和子他：当院における母児同室制について考える，母性衛生，Vol. 27，No 4，日本母性衛生学会
- 3) 村井則子：褥婦の保健指導—心理学的覚え書き—ペリネイタルケア増刊号

- 4) 北川 寛他：母児同室制に関する一考察，母性衛生，Vol. 29，No. 1．日本母性衛生学会．1987．
- 5) 吉本 妙他：母子同室制を試みて－母乳栄養と育児の不安についての調査－，第18回母性看護，日本看護協会．1987．
- 6) 丸山知子他：産褥期の母親の意識に関する調査研究，母性衛生，Vol. 28，No. 1．日本母性衛生学会．1987．
- 7) 池田由子：社会，家族の変化と育児不安，ペリネイタルケア，増刊号，メディカ出版．1986．

(平成元年2月8日。松山にて開催の第32回四国母性衛生学会にて発表)